農村計画部門――研究協議会

住み継がれるカタチ――限界の先へ住み継ぐ

藤原ひとみ
有明工業高等専門学校

本研究協議会は、9月2日(土)14:30～18:00に開催された。司会は姫野由香(大分大学)、副司会は清野隆(江戸川大学)が担当した。

主旨説明

佐久間康富(和歌山大学) 人口減少社会を迎え集落の限界や自治体の消滅可能性が懸念される中、計画学分野として、いたずらに危機感を煽るのではなくどう住み継いでいけばいいかを示すべく議論を重ねてきた。本協議会では、戦後生まれの高齢者を中心に維持してきた地域社会、地域空間が次世代によって「いかに住み継がれていくのか」という問いに向き合いたい。

主題解説

1――田園回帰1%戦略について｜藤山浩(一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所) 1%戦略について具体的な数値目標の重要性や、人口や経済の1%を変えていくことが地域を変えていき、持続可能な循環型の地域社会を形成するという具体的な処方箋が示された。また空間的な観点から、集落を支える複合的機能を持った小さな拠点の設立、地域の記憶の継承による郷土愛の醸成の重要性が言及された。

2――アートで風景を住み継ぐ｜大橋実咲(合同会社アート・マネジメント・しまなみ) アーティストのアート活動をマネジメントするという立場から、アート活動を通じて地域と関わっていく取り組みを紹介。地域の持つ価値をアーティストが再発見し表現することを契機にうまれたネットワークが、地域活動の担い手になり得るという構図が示された。

3――石産業で浜を住み継ぐ｜高橋頼雄(雄勝硯生産販売協同組合) 被災の影響により分散居住が進んだ雄勝における産業の継承、まちづくりの現状が報告された。地域の魅力の発信や生業となる産業の継承による住み継ぎがある一方で、圧倒的な住宅不足や、復興計画のもたらす景観破壊や震災後できた交流拠点の移転などの矛盾が地域の魅力を損なっていく側面が示され、地域に根差した計画の重要性が示唆された。

4――地域の継業とセットアップ｜内平隆之(兵庫県立大学) LLPを活用して廃業する茶園の再生を行い、自然資源の荒廃を防ぎながら就農希望者へと生業を引き継ぐ取り組み事例を紹介。地域が住み継がれるためには、新たに起業を支援するのではなく、地域で継がれてきた生業の継業をセットアップする必要性が主張された。

討論

木下勇(千葉大学)、柳田良造(岐阜市立女子短期大学) 現実に即した多様な住み継ぎのカタチの事例がある中で、今後は子育て環境の充実や国際化への対応にも目を向ける必要性が示された。持続可能な地域づくりにはそれぞれの地域が持つ力を活かしていくための仕組み、支援体制を構築するデザインの力が重要である。多様な担い手による地域維持のコストをどう応分負担していくかは課題であることが示された。

まとめ

平田隆行(和歌山大学) 新しい住み継ぎのカタチとして、居住者という核が縮小しても周囲の縁(担い手)を増やすことで地域維持のための活動量を変えずに持続性が担保されるモデルを提示、加えて期間を区切り明確な目標を示すことでコトを起こしやすくし、次世代への継承が容易となることを示した。縁を地域に惹きつける引力は地域の魅力(生業、記憶、風景など)であり、それが住み継ぎの原動力となる。今後はその魅力に対し空間計画の面からのサポートが必要であることが示された。

農村計画部門――パネルディスカッション

空間創造が風景をまもる時――文化的景観の進化的保全と建築・デザイン

三笠友洋
西日本工業大学

大和田卓
日建設計

本PDは9月3日(日)10:00～13:30に開催された。司会は工藤和美(明石工業高等専門学校)、副司会は天満類子(広島工業大学)が担当した。

主旨説明

工藤和美(明石工業高等専門学校) 文化的景観の保全とは地域の姿を固定的に維持するのではなく、その地域が持つ特徴や履歴を受け継ぐと同時に進化することを想定するべきである。創造的な表現行為を通じて、長きにわたり地域で育まれてきた風景のまだ広く知られていない真実性をいかにあらわにするか、その創造の醍醐味を学ぶ機会としたい。

主題解説

1――近露のツリーハウスカメラからリヤカーメラまで(光をみること)｜佐藤時啓(東京藝術大学) 地元住人の協力によってつくられた近露の《ツリーハウスカメラ》(2010年)の制作過程を紹介し、カメラオブスキュラによる倒立、平面化された何気ない日常の実況風景によって、普段気が付かなかった風景を観光客だけでなく、住民にも再認識させる可能性を提示した。

2――Five Mountains Festival｜Tanto Mendut(Founder of Five Mountains Community/Borobudur) ボロブドゥール周辺に点在する5つの山のコミュニティによる祭典について紹介し、地域のアイデンティティ、創造性、自立性、神聖な伝統の保全が組み合わさることで、急速な現代化に対する文化的な盾になることを提示した。

3――Community Initiatives on Cultural landscapes Conservation through Performing Art Activities｜Titin Fatimah(タルマナガラ大学/インドネシア) ボロブドゥール周辺の山々の村人によるパフォーミングアートが、人間と自然との関係、神聖な場所への尊敬、コミュニティの伝統的知恵をいかに反映しているかを示し、文化的景観の保全におけるパフォーミングアートの重要性を提示した。

4――Industrial Cultural Landscape RUHR｜Christa Reicher(ドルトムント大学/ドイツ) ドイツのルール工業地帯の炭鉱は既にその本来の役目を終えて存続の危機に瀕していたが、ハードを壊すのではなく保存し、また散在するそれらの施設同士を新たなリンクを結ぶことで、観光資源として転用し、国内外から多くの人が集まり経済効果が生まれたことを提示した。

5――Naoshima Hall｜三分一博志(三分一博志建築設計事務所) 本年、建築学会大賞を受賞した《直島ホール》(2015年)の紹介を通じて、三分一氏の設計理念である「地球の一部としての建築」の在り方や、直島の既存建築の配置調査と模型を使った風や水の動きに応じた建築の設計プロセス、そしてその後の住民による使われ方を提示した。

討論

さまざまな分野、スケール、国籍で活動しているパネリストが並ぶところ、それぞれの創造、研究活動の共通点が主な議題となった。議論を通して、5名の活動は地域性に着目する点はもちろん、その体験を通じて人々を巻き込んで「一体化」すること、そしてその背景には「どういう将来を生きたいか」という課題と提案が共通しているのではないか、という認識に至った。

また、Reicher氏から三分一氏には「風や水の流れの調査を活かした設計を都市スケールに活かしてみたらどうか」など、パネリスト同士の視点の違いによって、それぞれの活動の新たな可能性が示される機会となった。